



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第98回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えします。

●皆さん新学期が始まりました。新1年生も新しく部活動に加わることでしょ。今年度も筆者と高校野球の「マナー」と「ルール」について一緒に勉強していきましょう。さて今回は、2019年度の公認野球規則について12項目の改正があり、その中で高校野球に関連する5項目と規則適用上の解釈(1項目)の内容を紹介します。

1 2019年度の公認野球規則及び高校野球特別規則の改正

1 3.01【軟式注】を次のように改める。(下線部を改正)

【軟式注】 軟式ボールは、外部はゴム製で、M号、J号、D号、H号の4種類がある。
M号は一般用、J号、D号は少年用のいずれも中空ボールで、H号は一般用の充填物の入ったボールである。
(以下略)

軟式野球の使用ボールの規格が一部変更になり、J号が加えられ4種類となりました。
なお、高校野球(軟式)においては、「M号(一般用)」を使用しています。

2 5.07(b)を次のように改める。(実線部を改正、点線部を削除)

投手は各回のはじめに登板する際、あるいは他の投手を救援する際には、捕手を相手に8球は超えない準備投球をすることは許される。この間プレイは停止される。
各リーグは、その独自の判断で、準備投球の数や時間を制限してもさしつかえない。このような準備投球は、いずれの場合も1分間を超えてはならない。(以下略)

今回の公認野球規則の改正により、投手の準備投球は①8球を超えない②1分間を超えないと規定し、球数制限と時間制限をなくしました。しかし、高校野球では、従来同様の準備投球を行う観点から、「高校野球特別規則 29」を設定しました。

29「準備投球の取り扱い」

捕手を相手に許される準備投球の数と時間については、8球以下1分間を超えてはならない。(規則 5.07(b))

高校野球特別規則 29 を設定したので、高校野球では従来同様の取り扱いになります。当県では、準備投球については次のように運用しています。①先発登板時⇒7球 ②イニング間登板時⇒3球 ③投手交代時⇒5球
ただし、突発事故等で、ウォームアップをする機会を得ないで登板した投手には、必要と思われる数の準備投球が許される場合もあります。

3 5.10(m)および同【注】を追加する。

(m) マウンドに行く回数の制限

以下の規則は、メジャーリーグで適用される。マイナーリーグでは、1試合のマウンドに行ける回数について、本項規定と異なる制限を設けてもよいし、制限を設けないこともできる。

(1) 投手交代を伴わないでマウンドに行くことは、9イニングにつき1チームあたり6回に限られる。延長回については、1イニングにつき1回、マウンドに行くことができる。(中略)

【注】 我が国では、所属する団体の規定に従う。

メジャーリーグで適用されるマウンドに行く回数の制限が追加されています。日本の各団体は、それぞれの特別規則等を継続する方針から【注】を設けています。なお、高校野球では、従来から「高校野球特別規則 15 タイムの制限」において、守備側・攻撃側のタイムの回数が明確に規定されていますので、確認してください。

4 8.02(b)【注1】を削除し、【注2】を【注】とする。

【注1】インニングの表または裏が終わったときは、投手および内野手がフェア地域を去るまでにアピールしなければならない。 ☞ 削除

アピール消滅の基準については、5.09(c)(アピールプレイ)において、同趣旨の規定があるため削除されたものです(【注1】が削除され、【注2】が【注】となっています)。

したがって、アピール消滅の基準については、従来同様であり、これまでの取り扱いと変更はありません。

参考までに5.09(c)を記載します。

5.09(c)「インニングの表または裏が終わったときのアピールは、守備側チームのプレーヤーが競技場を去るまでに行わなければならない。(中略)「守備側チームのプレーヤーが競技場を去る、とあるのは、投手および内野手が、ベンチまたはクラブハウスに向かうために、フェア地域を離れたことを意味する。」

5 8.02(c)の末尾に次の文を追加する。

投球カウントの誤りの訂正は、投手が次の打者へ1球を投じるまで、または、インニングや試合の最終打者の場合には守備側チームのすべての内野手がフェア地域を離れるまでに行わなければならない。

上記のように、投球カウントの誤りの訂正基準を明確にしています。また、審判員自身のほか、記録員も9.01(b)(2)【注】により、投球カウントの誤りについて、審判員に助言ができます。

2 規則適用上の解釈について

プロ・アマ合同野球規則委員会で確認された規則適用上の解釈について、紹介します。

○ 5.09(b)(1)ラインアウト時の「触球行為」の解釈について

「触球行為」とは、①単に野手がボールを保持した状態でその保持されたボールが収まったグラブ或いはボールを握っている手で走者にタッグしに行くことに限らず、②打球(送球)を処理して、ボールを保持した状態の野手がステップしただけで走者の方向を向いた場合でも、たとえば手を差し出す行為がなくても、アウトにしようとする行為だと審判員が判断できれば「触球行為」とみなすことが確認された。

例えば、野手が走者にタッグをしようとしたとき、その走者がタッグされまいとしてすでに大きく走路から外れた場合、②の解釈によりアウトが宣告できるということである。

5.09(b)(1)

「走者が、野手の触球を避けて、走者のベースパス(走路)から3フィート以上離れて走った場合、走者はアウトとなる。」

上記のように、ラインアウトの適用には、走者が野手の触球を避けたという状況が条件となっていることから、ボールを保持した野手がボールを持ったグラブまたは手で走者にタッグする行為が前提であることに変わりはありません。選手の皆さんは、普段から走者に対してタッグ(触球)するという意識を持ってプレイしてください。

- さて、今回は、**2019年度の公認野球規則及び高校野球特別規則の改正と規則適用上の解釈**について、お知らせしました。選手の皆さんは色々なこと(マナー／ルール)で疑問に思ったことがあれば、監督／部長先生、または、オープン戦に訪れた審判委員に是非質問してください。それでは次回まで。